

(別紙 2)

論文審査の結果の要旨

著 者 ビック・ターナヴァットー
論文題目 初期仏教における聖典成立と修行体型

本論文は、初期仏教資料論として包括可能な1, 2, 3章と、その資料に基づき、初期經典中の修道論に関する主要概念を考察した第4章との二部から成る。何れの課題も仏教研究全体にとって必要不可欠な基礎をなすものであり、洋の東西を問わず研究成果の蓄積が最も豊かな分野である。氏はこの課題に正面から挑み、関係資料を広く綿密に辿りつつ諸学説を批判検討し、初期仏典資料を解釈する際の態度について、従来の見解を覆す新たな知見を提示した。

著者は第1章でインド仏教史構築の際の礎石となる仏滅年代論を取り上げ、南伝セイロン説と北伝有部説の歴史資料としての信憑性を比較検討した結果、日本の研究者間ではおよそ疑われることのなかった宇井、中村両説を斥け、『島史』の年代を採用するに至る。第2章では律文献の二つの核を構成する *pratimoksa* と *skandhaka* の成立を論じ、諸部派間での構成の相違と内容の一致、口伝による変更の困難性などを根拠として、この二つはブッタ在世中にその原型がほぼ確定したと見る。第3章では南伝の聖典語であるパーリ語の起源とニカーヤの成立過程を碑文資料と比較において論じ、四ニカーヤは *suttantika* の語が普及する以前に終了し、ほぼその全体をブッタの説として扱い得るという現代英国系研究者の説に与する結論に至っている。総じてこの資料論に示された著者の立場は、初期仏典全体が一定の結束性をもって伝承され、その意味で統一的、体系的に解釈されるべき文献群として理解するものであり、異なる時代層の文献が整合性を欠いたまま合成されたものと見る日本の学会で主流をなす理解に比し、際だった独自性がある。

こうした著者の立場を例証する意味を持つ第4章は、個々の経を含むニカーヤ全体を大きな一テキストとして捉える視点に立ち、そこに現れる八正道、十無学法、七覚支、四念処、三学など、一見、相互に重複、あるいは矛盾するかに見える諸概念の関係を検討する。その結果、実際にはそれらの述語はニカーヤ全体の文脈において、結果と道程という二つの異なった側面を持ちながら有機的に組織化され、一つのまとまった修道体系を作っていることを明らかにした。

本論文は、過去の研究の層が最も厚く、論じ尽くされた観のある大きなテーマを再度取り上げ、徹底して批判的な態度で考察し直したものであり、その成果は学界に対して貢献するところがまことに大きい。論証過程の文章表現や論文の構成に関して改善すべき余地は残されているものの、審査委員会は、本論文を博士(文学)を付与するに十分価するものと判断する。